

メッセージアウトライン

ローマ 1 : 18~23 「罪の現実」

[18]「というのは、不義をもって真理をはばんでいる人々のあらゆる不敬虔と不正に対して、神の怒りが天から啓示されているからです」

神に対する私たちの「罪」は根本的で重大なものである。「不義」とは神に対する反逆。

「真理をはばんでいる」とは神の真理を受け入れようとしないこと。「不敬虔」とは神に対する人間の不信仰。「不正」とは他の人に対する不誠実、悪をあらわしている。このようなことを行っている人間に神は天から怒りを啓示されている。「啓示」とは「あらわされる」という意味で、神の怒りが天からあらわされているとパウロはいうのである。

[19-20]「それゆえ、神について知られることは、彼らに明らかです。それは神が明らかにされたのです。神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって。彼らに弁解の余地はないのです」

天地自然を謙虚になって観察する時、それは偶然ではなく、その背後にそれらを創造されたお方がいるのではないかという思いに導かれる。これを神の自然啓示という。それゆえ、その神を知らないという人間には弁解の余地がないとパウロは言う。

[21]「それゆえ、彼らは神を知っていながら、その神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなりました」

創世記の歴史を見るとこのことはよくわかる。最初に造られた人間アダム以後、数代を経ずして人間は真の神がわからなくなり、神をうやまう思いに代わってむなしい思いが入り、無知な心がさらに暗くなってしまった。人間が増え広がれば増え広がるほど、神を知る思いは失せ、神から遠く離れた存在となってしまった。その歴史の行き着いたところが大洪水による神のさばきであった。→創世記6:5~7

このさばきによって箱舟に入ったノアの家族しか地上に残されなかったが、しかしその子孫が増え広がるにつれて、人類はまた以前と同じく神を神としてあがめず、感謝もせず礼拝もしない罪の歴史を今に至るまで刻み続けているのである。

[22-23]「彼らは自分では知者であると言いながら、愚かな者となり、不滅の神の御栄えを、滅ぶべき人間や、鳥、獣、はうもののかたち似た物と代えてしまいました」

ここに書かれているそのとおりの現実が世界中で、そして日本においても見られる。

まさに人間は自分では知者であると言いながら、愚かな者となり、真の神を知り礼拝する代わりにそれ以下のやがて滅ぶべき物を神としてしまったのである。これは罪のもたらした結果である。人間の思いが真の神に向かうべきところを罪の性質がその思いをねじ曲げて間違ったものに向けさせている。これが人間の現実である。

人間はこのままでは神のさばきにあい、滅びに行ってしまう。人間は神の御子イエス・キリストによって救われるまではこのような状態にある。それゆえどのような人でも救われる必要があるのである。

「福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です」→ローマ1:6 私たちはこのことばをもう一度かみしめて、この尊い福音を宣べ伝えていくことが大切である。